

連続の心地よさを求めて



寺尾信子

2021年12月29日の朝、京都嵐山・渡月橋の南側の宿から2年前にオープンした福田美術館に向かった。嵐山を背にして大堰川(桂川)対岸から臨む福田美術館とMUNIホテルは今まで永くそこに居たかのように、朝日を浴びて、景観の中にじっくり溶け込む静かな佇まいだった。いずれも安田幸一氏の設計、構造設計は金箱温春氏である。前日はMUNIホテルのカフェの室内から川と橋の景観を楽しんだ。福田美術館では木島櫻谷(1877-1938)展を鑑賞した。櫻谷は、明治10年に京都三条の商家に生まれた近代の京都画壇を代表する巨匠。展示内容が素晴らしく、ぐんぐん引き込まれた。精緻な花鳥画はもとより、動物画、人物画、歴史画、庶民の生活風景画まで幅が広く、感銘を受けた。群をなして飛ぶ鳥の美しい色合いと羽ばたきが聞こえそうな動的な作品に目が釘付けになった。ふと見ると100年前の作品。宿から歩いて橋を渡って館に入り、建築を楽しみながら緩やかな階段を進んで、足の停まったところに100年前の絵。この快さは何だろう……。お茶を片手に、カフェでぼんやり川を眺めながら、その心地よさは、時空を超えた「連続」かもしれない、と思った。嵐山に美術館をつくらうとされた創始者の方の思いと託された建築家の思い、秀逸な企画を練る主催者の思い、さまざまな思いが繋がって、人の心に豊かな実りを着地させてくれる。次回の再訪への思いも連続させてくれた、心豊かな暮れであった。

2021年は連続についての思いを在住の杉並でも経験した。北山恒さんから『東京人』(2021.12/No.447)を送っていただいた。1971年入学(横浜国大)の同級生の氏からは、横国大、法政大教授へと研究の場を移された後も、時折、著書をいただいていた。「テーマ『コモンズを再生する東京』に『阿佐谷パールセンター』のことも扱っているのでは……」との添え書き。法政大学「江戸東京研究センター」を陣内秀信氏(法政大名誉教授、杉並区在住)と共に立ち上げ、「近未来東京研究」をテーマに5年間研究、成果は『未来都市はムラに近似する』(彰国社)にまとめられている。2020年に「紐マップ」でコモンズ再生を示す」という商店街研究が行われ、『東京人』はその特集記事。商店街は線状の公共空間を地域に提供してい

る、という法政大学大学院チームの紐マップは圧巻である。通勤者が地域に戻ってきた時、今までにない新コミュニティが生まれることは容易に想像できる。区内には「古道」を含む道・幹線道路、鉄道用地、河川などが東西と南北に縦糸・横糸のように織りなしている。それらはコミュニティのことを考えるときにも、2050年脱炭素社会の地産地消型再生可能エネルギーのネットワークを考えるとときにも有望な線状空間、地勢を考えるとまちづくりの手掛かりが得られそうなことに気づく年でもあった。

※都内の商店街を地図にプロット、商店街の徒歩圏を約600mとすると、23区はほぼすべてカバーする、との注釈がある。

京都から杉並へ、そして江戸川区の葛西臨海水族園へと思い巡らせる。2020年にJIA環境会議の中に「超・環境配慮型リノベーションWG」(主査：安田幸一氏)が立ち上がった。谷口吉生氏設計の葛西臨海水族園が30年強の歴史を終えてしまうかもしれない、危機感を有志で共有し、歴史を連続させようと2021年も必死であった。安田氏の描かれた太平洋パースは活動のシンボル画である。東京都は2022年1月12日にBTO(建設・譲渡・運営)方式で整備する「葛西臨海水族園(仮称)整備事業」をWTO対象の一般競争入札で公告した。美しいガラスドーム棟の歴史が断ち切られることは、ぎりぎりのところで回避できたようだ。しかしその存続のし方が、これまで園を来訪した6,000万人の都民や来館者にとっても、心地良い継承となれるのか、今は不安のほうはずっと大きい。1000年でも、数百年でもない30年余の美しい景観・建築の歴史を連続させるため、太平洋パースは今年も連続への期待を大きく背負っている。



葛西臨海水族園-再生提案活動シンボル画-太平洋パース (JIA環境会議-超・環境配慮型リノベーションWG)